

# しがだい

—滋賀大学広報誌—  
第7号 平成13年4月

## 特集 新入生歓迎!!

学長からのメッセージ

新世紀に入学された皆さんへ

在学生からのメッセージ

素晴らしい学生生活のために  
大学生にとっての「教養」とは

連載 大学探検

附属図書館編

トピックス

完成!! 教育学部研究棟

## 平成13年度 主な行事予定表(学年暦)

	教 育 学 部	経 済 学 部
入 学 式	4月6日	
新入生オリエンテーション	4月9、10日	
春学期授業開始	4月11日	
定期健康診断(新入生)	4月11、12日	4月11日～13日
新入生合宿研修	4月14、15日	
定期健康診断(2回生以上)	4月18、19、23日	4月16、17、19、25、27日 5月14日
学内レガッタ	5月12、13日	
新入生歓迎マラソン		5月中旬
開学記念日	5月31日	
滋賀・和歌山大学二大学学長杯 争奪総合定期戦(滋和戦)	6月中旬	
春学期試験	7月24日～31日	7月18日～31日
夏 季 休 業	8月1日～9月30日	
近畿地区国立大学体育大会 (近国体)	8月中旬～下旬	
秋学期授業開始	10月9日	10月1日
レ ガ ッ タ		10月上旬
大 学 祭	11月中旬	11月上旬
リーダーズ・トレーニング		12月上旬
冬 季 休 業	12月22日～1月6日	12月21日～1月6日
学 年 試 験	1月29日～2月5日	1月29日～2月18日
卒 業 式	3月26日	

### 【表紙解説】

表紙の写真は、石山寺上空付近より琵琶湖南湖方向を望んだ空中写真である。手前の瀬田川には、並行して走る名神高速道路と東海道新幹線、つづいて旧東海道の瀬田唐橋、国道1号線、JRびわこ(東海道)線と、日本の東西を結ぶ幹線路の橋梁があり、その向こうには近江大橋がみえる。左手には大津の市街地、右手には湖南平野が広がり、湖岸には汚水処理場が設置されている人工島、矢橋帰帆島がある。上方、やや遠方に琵琶湖大橋もみえ、その先には北湖がひろがり、左手には蓬萊から比良に続く急峻な山地が見えている。かつての近江八景の舞台となった各地の変貌は著しい。【写真は平成5年冬撮影のもの、滋賀県に提供していただいた】

# 新世紀に入学された皆さんへ

学長 加藤 幹 太



二〇〇一年という新しい世紀のスタートに当たる年に、滋賀大学へ入学された皆さんに心からお祝いを申し上げます。全く偶然にこの年に入学することになったと言えばそれまでですが、何か大きい潜在力に祝福されているような喜びを感じて、これからの大学生活を始めてほしいと思います。

さて、二十世紀はまことに複雑で激変の時代でした。二次にわたる世界大戦とそれに続く冷戦時代を経て、ようやく地球上の人類は平和と繁栄の時代に入るかと思われましたが、未だに局地的な紛争と経済力の強弱は至る所で矛盾を露呈していません。究極の平和は、全人類が高い生活文化水準に達し、過去の政治・経

済、宗教・民族のわだかまりを捨て去るまで、地球上に出現しないのではないかと思われます。しかし、このことは全人類を均等化することの意味しているではありません。各民族の言語・文化・宗教の多様性を保持しながら、他民族の異文化への寛大さが要求されているのです。

二十世紀の後半になって、しきりに「国際化」ということが「情報化」と並んで叫ばれるようになりました。江戸時代の鎖国政策がもたらした欠点を修正するために、明治政府は文明開化に奔走しましたが、この時代の国際化は西欧文明の吸収が中心でした。現在の「国際化」は全く世界全体を視野にいれたものになっています。二十一世紀は、各国が、また各個人が地球全体を強く意識し、また考察する時代であります。地球上の人類のアイデンティティを認識し、平和の問題にしても環境の問題にしても、すべて地球全体を考える必要があります。「Think globally, act locally」(地球全体を考えよ、しかし地域的に行動せよ)という言葉が、環境問題についてよく引用されます。私はこの言葉は何も環境問題に限定されることなく、世界のあらゆる難問を解決してゆく際にとるべき態度であると思っています。広く世界に目を向けて問題の本質を考えながら、身近な問題解決



に行動するということでもあります。国際的な活動の重要性の増大からみて、大学での教育において、国際言語である英語の学習と情報リテラシーの習得は特に大切です。また滋賀大学では外国での研修機会も提供していますし、留学生も一四〇名の多数に達していますので、この人たちとの交流も役立つでしょう。世界全体を常に念頭において勉学されることを願っております。



新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。長く、苦しい大学受験も終わり、これからの大学生活に向けて、期待と不安の気持ちでいっぱいのことだと思います。その気持ちをエネルギーに変え、滋賀大学での生活が素晴らしいものとなるように一生懸命がんばってください。

大学というところは、今までの生活とは比べられないほど、自由なところです。4年間（普通に卒業できればの話ですが……）というのは、きっとあっという間に過ぎてゆくはず。勉強、クラブ、バイトなど、本当にいろいろなことがあると思いますが、自分の意志をしっかりと持ってがんばってください。ただし、自由になる分、そのすべての行動に責任が伴うことを絶対に忘れないでほしいと思います。滋賀大学は2学部しかありませんし、またキャンパスが別々なので単科大学のようで小規模に感じるかもしれませんが、だからこそ、多くの人間との深いつながりを作ることが出来ると思います。このような環境の中で様々なことを経験し、卒業するときには「滋賀大学にきて本当に良かった！」と思えるようにして下さい。大学での生活は、確かにしんどいこともあると思いますが、自らの努力で乗り越えてほしいと思います。新入生のみなさんの大学生活がよりよいものになるよう祈っています。

松下 直示（教育学部学生自治会常任委員）

## 生活のために

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。学部生になられる方も、大学院生になられる方もそれぞれ4年、2年という間（それ以上の方も居られるかもしれませんが）滋賀大学で過ごされるわけです。そこで皆さんに御祝いを兼ねて、一文を寄せさせていただきます。

大学が学問の場であることは言うまでもありませんが、よく言われているように学問以外の面でもいろいろなことを体験できる場であるともいえます。皆さんはこれから滋賀大学にいる間、様々なことを経験することと思います。それは、新しい人々との出遭いや、楽しい大学生活であることは疑う余地はありません。また一方で、苦しいことや困難にも遭遇するでしょう。それは、学業の不振であったり、病気であったり、交通事故に代表されるトラブルであったりするかと思います。それらの問題に対処するには友人などの協力を得ながら、そして最終的には自分の力でその直面した問題に立ち向かうわけです。それはある意味孤独なことですが、「自分はこうしたい」という分かり易い目標を持つことで、克服されると思います。大学時代の財産として学問の他にも、このような経験は大学卒業後も生かすことの出来るものだと思います。新入生の皆さんには、問題に対する明確な考え方と問題に直面した時に頑張れる方法を身につけて大学の次のステップに繋げていってもらいたいと願っています。がんばってください。

松尾 望（大学院経済学研究科）



## 在学生からのメッセージ

新入生の皆さんご入学おめでとうございます。皆さんはつらい受験時代を終え晴れて大学生となったわけですが、これからの大学生活をどのようにしたいと考えていますか。さぞかし夢や希望で胸をいっぱい膨くらませていることでしょう。実際、私達もそうでした。入学当初、大学生の間に「あれもしたい、これもしたい」という思いをめぐらせていました。しかし、大学生活などあつという間です。私自身も入学してもう3年目。大学生活も半分が過ぎましたが、当初したかったことの半分もできていません。卒業された先輩が後輩の私にこのようなことを語ってくれました。「やりたいことがあるなら今のうち。ぼーとしている暇などないぞ。」今、私はこの言葉をそっくりそのまま新入生の皆さんに送りたいと思います。大学には数多くの誘惑があります。時には楽しくその誘惑に誘われてみるのもいいでしょう。しかし、ちょっとした隙にその誘惑にどっぷりはまってしまう。

今、皆さんが胸に秘めている「やりたいこと」をやるには、しっかりと自分で物事を判断し、着実に実行に移していかなければなりません。高校のときのように先生や親が逐一面倒を見てくれることはないのですから。繰り返しになりますが、大学生活はあつという間に過ぎていきます。五月病にかかっている暇などありません。大学時代というものを無駄にしたくなければ、しっかりした主体性を持ち、貪欲にがんばって下さい。

山田 耕平（滋大陵水新聞会編集長）



## 素晴らしい学生

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。

昨年4月、20数年ぶりの自分の入学式を迎えた私にとって、この大学院での生活は得難いものを得ることのできた1年でした。いったい何を得ることができたのかを二つお伝えすることで、みなさんへの歓迎のメッセージとします。

先ず一つは、“学ぶ喜び”を知ることができたということです。入学して、自分が今までいかに学ぶことから遠ざかっていたかを思い知らされ、いかに知らなさすぎたかということにショックを受けました。しかし、大学院での学びは苦しくてもそれ以上に楽しいものです。それはやらされている学びではなく、自分から望んでやりたいものだからだと思います。

もう一つの得難いものとは、すばらしい“出会い”です。大学の先生方は、学問の上ではもちろんですが、人間的にも奥が深くて学ばせてもらうことがたくさんあります。そんな先生方との出会いは、ここに来たからこそだと思えます。また、一緒に学ぶ仲間との出会いもあります。大学院では、大きく年齢の離れた学生が当たり前のように机を並べて学んでいます。私はここで、今まで味わったことのないような不思議な仲間意識を感じました。ここでの“出会い”は、大きな私の財産になりそうです。

入学されたみなさんと一緒に、これからも“何か”を見つけられたらと思います。

三上 ゆるぎ（大学院教育学研究科）

# 大学の教養というもの

大学という場に限り、私は人間にとつて本当の「教養」とは、危機にあつて私たちが支えてくれるもの、の考え方、だと思つて行くと、さまざまに危機的な状況に陥ることがあります。

親や友人との争い、受験や就職の失敗、恋愛や結婚や家庭のトラブル、仕事や病気や老後の悩みなど、考えてみればきりがありません。そうした中で、私たちは人生の岐路に立たされて最終的な決断を迫られ思い悩むという、ぎりぎりの経験を二度や三度はするものです。

人生を順調に歩んでいるときには、いわばノウハウ的な知識で十分やっていけるのですが、そうした時にはそれらの知識はあまり役に立ちません、まさに、私たちの生きる上での「核」となるものこそが問題となるのです。わたくし自身も何度か、そういう危機に陥り思い悩んだ経験があります。伴侶を選ぶ際や職場のトラブルなど。

いま振り返つてみても、命の縮む思いがする経験です。

そうしたとき私を支えてくれたのは、親や友達から何気なく聞いた言葉であつたり、あるいは高校や大学時代に暇にまかせて読んだ小説の一節であつたりしたわけですが、とりわけ、大学の教養時代に読みふけたドストエフスキイの小説や、学部に進んで以降現在にいたるまで読みつづけているマックス・ウエーバーの論文など、その中に見られるものの考え方が、そうした危機の時に私を大きく支えてくれたのだとつくづく思います。そして、そういうものこそが、本当の「教養」だと私は思つたのです。

さて、話を広げてつぎに、「大学に

## ての「教養」とは

。また「最近の若い者は教養がない」という声をよ何のために必要なのでしょうか。るといわれているのですが、大学で専門を学ぶのはなければならないのでしょうか。クイズの名人のように、うか。また共通教育とか一般教育とか、いろいろな「教養」から、しかたがないからとるのではなく、本当に面白。な検討とは別に、そもそも教養とは……という観点

おける教養」というものについて少し触れてみたいと思います。大学においても話はやはり同じです。危機にあつて輝き始めるもの、これこそが本当の「大学の教養」だと私は思つたのです。

大学の危機というと、日本ではなんと、第二次大戦下の大学です。そこで感動的な話をひとつ思い出します。学徒出陣で出征し、九死に一生を得て生還した吉田満の手記『戦艦大和』に紹介されたものです。

昭和十八年十一月、最初の学徒出陣を数日後に控えて東京大学の小石川植物園で法文系学生の壮行会が開かれます。そのとき教授団を代表して挨拶に立つた末広蔵太郎の言葉です。

教授は自身のパリ留学中の、第一次大戦終結時に街頭で市民たちと共に味わつた沸き立つような喜びを語つたのち、つぎのように学生たちに語りかけます。

「諸君は征かねばならぬ。私としてはただ、一日も早く戦争が終わり、諸君が一人でも多く無事に帰つて来てくれることを、祈らずにはおられない。戦場におもむいた以上は、自分が兵隊である前に学生であることを、戦う人間である前にまず生きる人間であることを、一日として忘れないでほしい。

再び平和のよみがえつたあとの学問の世界を、諸君の若い力でよ



り豊かなものにしてもらえることを約束してほしい」と。

出陣する学生は頭を垂れて聴き入り、厳しい戦局と弾圧の中にあつて、これほど強く平和を訴える言葉を聞く幸福を噛みしめたといつたのです。

私の年齢になると、老教授の言葉の中に込められた深い悲しみと、若者に対する慈しみをどうしても感じます。そしてそれ以上に、こうした言葉に込められた時流に流されないいぶし銀のような知性と感性こそが、大学における本当の意味での「教養」だと思つたのです。

# ひとわにこく 教養をめぐる人鱈国の寓話

年老いた鱈に、大学では何を学ぶべきかと孫の鱈娘がたずねた。この娘の両親は離婚して、孫は顔も性格もそっくりな祖父になつていてた。

「おまえはまだ高校にはいったばかりだろうが。そうかい、お兄ちゃんがきてくれと言つたのかい。何だつてそんなことに妹をつかうのかね。おまえのお兄ちゃんは、どこからみても頭が空っぽだ。何でも学んだらよかるう。いつ

たい、あいつは学ぶ必要のないことがあるとでも思っているのか。役に立たないことで時間をつぶしたくないって？

バカの役に立つものなどろくなものではないさ。鱈爺はそれから、近頃の娘どもは人前で化粧などしているが、そのうち電車の中ですっ裸になつて着替えもすることになるだろうとかうなりだしたので、あわてて孫娘は教養というのはどういうことなのと訊いた。

## 大学生にとって

いま大学では教養教育をみなおす動きが活発です。でもいったい教養って何でしょうか。大学では専門教育と教養教育という二本の柱があるとして、なぜ大学にきてまで、教養を学ばなければと知っていただければ教養があるといえるので、新入生諸君は、入学と同時に、語学や情報教育、科目をとらなくてはなりません。決まっているかくて役に立つ教養を身につけてほしいと願っています。今回は、いま大学ですすめられているフォーメから、お二人の先生に寄稿していただきました。

「どうしたんだい、おまえ熱でもあるんじゃないのか。無学無教養というが、いくら知識があつたつて、時と場所のわきまもつかん愚か者はいる。死んだおまえのバアさんは、バカは笑いで分かるといつてたな。しかし、あれくらい冗談のわからない女もなかったなと突然想い出がよみがえつてきて、鱈爺はにやにやした（鱈の笑いとかはあまり気持のいいものではないな）さすつだ。

「え、なに、大学生にとっての教養だつて？ そんなことはおまえの父親に質問したらいいだろう。かりにもあいつは大学の教師なんだからな。それぐらひ話してくれるだろう。おまえ、いまだに親父とは口もきかないの

か

「お父さんの話は難しくて。何か人間とかいう生き物が書いた教養についての寓話というのを話してくれた。

それが地下の洞窟のたとえ話で、坂を登つていくと地上に出られるんだけど、みんな洞窟の奥底に向けて身体が固定されていて、振返ることができないから、誰も地上があるなんて知らない。これが教養のない状態のたとえだというよ。

洞窟のまん中あたりに、火が燃えていて、その下の方にあるいろんなものの影を奥の壁に映している。人間が見たり聴いたりしているのは、そういう壁に映る影や反響にすぎないのに、人間はそんなものをめぐるつて、おれが正しい、けしからんのはおまえのほうだと争つたり、ほかのやつらは意識が低いと威張つたり、損だとか得だとか騒いでいる、哀れな生きものなんだつて。

たまに後ろを向く人間がいても、いきなりぎらぎらした光を見ると眼がくらんで何も見えなくなるから、たいていはそんなことがあつたのを忘れるそうよ。あるときなんか眼を慣らした人間が、隣の人間にもむりやり同じようにさせようとしたので、憎まれて殺されてしまったというのよ。そこで穏やかなやり方で、昼の世界に眼を慣らすために大学がつくられて、数学が

教えられるようになったんだつて。ねえ、おじいちゃん、この話をつくつたのは人間じゃなくて鱈だと思わない」

「とびきり大きな鱈だろうよ」と爺は答えた。「わしらの世界にそっくりだからな。数学の苦手な人間はどうしたんだらうつて？ おまえ、分数の計算はできるかい。ああ、そうかい。数学は知つたかぶりをすると先へ進めないからな。しなくたつて進めない？ 身も蓋もない話だな。

その巨大鱈のいた頃は、数学は金儲けに関係がなかつたから、影の背後にある調和の美しさに眼が開かれるという長所が、よけい光つてみえたんだらうな。数学が教養だというのは詩や音楽と共通な部分があるんだが、しかし、こいつは何といつても影の本体の学問だから、影をつくる技術をうみだしたりする。手つ取り早く役に立つてくれるわけだ。おまえの父さんは、書物の学問のことも話さなかつたか？」「なんだか、おじいちゃんの話をしつかり聴きなさいというふうなことだつたよ」

小池 澄夫（教育学部教授）

森 智志（教育学部四回生）

「タイってどんな国だろう?」「十六日間も過ごせるのかなあ?」と不安な気持ちで日本を出発しましたが、その楽しい時間はあっという間に過ぎ去ってしまいました。

今回の研修の目的は「エコ・スタディー」で、事前に日本で講義を受けてからタイへ向かいました。まず市役所で住民の話聞き、続いて下水処理場の視察、黒い水が流れる川（ピン川）の水質調査、エビの養殖場とマングローブ林の破壊など、環境破壊の現状を見せつけられました。

日本は高度経済成長期に工業発展を優先したため、多くの人々に被害をあたえましたが、このような状態がいままさにタイで進んでいることにショックを受けました。

最近になって日本ではようやく環境の大切さが叫ばれるようになってきましたが、タイではまだまだだったのです。いまの私にはこの現状をどうすることもできませんが、身近なところから環境を考えていくきっかけになると思いました。

また研修以外にも、タイの学生との交流など、普通の旅行では味わえないような経験もたくさんありました。タイの学生とは、日本に帰ってきた今でも、メールのやり取りをし、情報の交換をしています。

これまでと違う環境で生活し、地元の人々や文化に触れることによって、日本の生活では味わえないような異文化を体験することができたと思います。そしてそれは自分の人生において大きな自信になったと同時に、自分がひとまわり大きく成長したと実感しました。大変充実した十六日間でした。

## タイから日本を考える 異文化の環境から



山本 恵（経済学部四回生）

タイに出かけたのは去年の八月である。予備知識はタイの近代経済のみであった。先入観として何が私の中にあったのか考えてみると、技術力が日本よりかなり劣っているということであつたらう。その他には特になかったと思う。それでもこの技術力が低いという想定が、日常に対する数々の偏見を生じさせていた。

タイに着いて町並みを眺めていて、私が最も眼をひかれたのは電線であつた。

一本の電柱に三段か四段に分けて、二十から三十本も電線が引かれていて、ことに驚いたのである。日本ではこんなに多くの電線が縦横に走っていないよな、と日本の情景を思い出していた。

田舎町であ

るパッタニと、日本の彦根から大津までを思い比べ、タイでは電線の送電能力が日本より低いのだろうかと思ひ考えていた。

さらにこの町でも共通するのは、電線が随分低い位置に張られていることだつた。西欧人なら身長二メートルくらいの人は珍しくないだろう。そのくらいの人がジャンプすれば届くのではないかと思えた高さであつた。日本では「絶対」このよつな高さで張られていること

はない、そう思つてタイの安全対策が遅れていることに危惧すら抱いたのであつた。

あまつた電線が、体を伸ばしたへびのように垂れ下がつていたり、トグロ巻きにされて子どもでも手が届く高さに吊り下げられていたりするのを見たときは、なんて危険なことをするのかと憤慨したものである。それも大学近くの住宅街のど真ん中であつた。常夏の国でぐんぐん伸びる木々や蔭にからまれていた電線も時々見かけて、電線が切れるもとを放置しているとは何たることだと、行政担当官でもあるまいに眉をしかめていた。

そして日本に帰つてきて私は電線を眺めた。何たることだ！電線は数からみる限りは、タイと変りないではないか！ほんの五日前に飛つてきたタイでの光景を思い浮かべつつ慎重に比較してみる。日本のほうが若干多い気まです。日本の電気依存社会を、こんな角度から実感させられたのであつた。

電線の高さについてはどうであつたか。普通に道を歩いている分には、一番低い位置にある電線でも五メートルはゆうにあり、やはりこうでなくてはと思つた。だが「絶対」ではなかつた。鉄道線路の傍を走っている家庭用電線に、線路が高い位置にある箇所では手が届くのである。

一般的ルールを守つていればだいたいじょうぶかといつと、そうでもないことも見つけた。小高い石畳の上には草木が茂つていて、草刈をする人が月一度ほど登つている。その上に少し体を伸ばせば届く電線が通つているのだ。

さすがにあまつた電線を放置しているというのはなかつたが、木の枝や蔭が引つかかっているくらいのものは、あちこちにあることを見つけた。

日本の安全工事については、世界的に高いレベルにあるといえるのだから、それが完璧ではないことを認識させられたと同時に、安全の基準というものが本来どこにあるべきか、今の状態がそれを満たしているのかどうかを知つておくべきだと考えさせられた。

自分で思い込んでいる安全な状態と、実際必要な安全対策というものがずれているのではないかという反省を促された経験であつた。



橋本 雄一郎 (教育学部三回生)

僕にとってこの夏のミシガン州立大学の語学研修はとても有意義なものだった。ミシガン州立大学に行く前は、たいした英語力もない自分が英語で外国の人とコミュニケーションがとれるかどうか不安でいっぱいだった。案の定、最初の第一週目は大学の講師の方や町の店の人の言っていることがほとんど聞き取れない状態だった。そして買い物も満足にできず、先生とのコミュニケーションもあまりとれなかった。

しかし、第一週目が終わりにホームステイも過ぎた頃から急に聞き取れるようになった。町に出るのがそれまでは友達と一緒にでなければ不安だったが、このころからは一人であちこち出かけた。授業のほとんどは午前中で終わってしまったので、午後からは East Lansing の町をあちこち見て回ることが出来た。先生とコミュニケーションをする機会も増え、あちこちの国から来ていた留学生とも友達になれた。ミシガン州立大学の構内には体育館やショッピングセンター、テレビやラジオ放送局など様々な建物があり、探せば探すほど色々な施設を発見できた。僕自身スポーツが好きで、たびたびスポーツ施設に通い、そこでたくさんの友達を作ることができた。大学の授業以外ではナイアガラの滝やシカゴに観光で行った。噂でしか聞いたことなかったナイアガラの滝や、テレビを通じてしか見たことなかったシカゴの夜景を実際に見ることができて、本当に感動した。はじめて海外に行くと、日本で触れてきた英語と生の英語との違いを肌で感じる事ができた。本当に良い体験ができたと思う。

## ミシガン語学研修 生きた英語とのふれあい

渡邊 進二 (経済学部四回生)

二〇〇〇年八月一日から二十七日までの約一ヶ月、短期の語学研修という形で参加しました。このプログラムに参加したからといってわざわざ一ヶ月で英語がすらすら話せるようになったかといえは、そうでもないですが、相手の言おうとしている内容が以前よりすごく分かるようになって、リスニング力がついたことを実感しました。

授業をしていたいただいた先生との会話や、友達になろうとして話していこうとするときの相手との会話、道を尋ねるとき、スーパーやモールでのショッピング、ホームステイ、ナイアガラやシカゴへの旅行のなかで聞こえてくる英語、自分が使った英語すべてが勉強になりました。

また、仲良くなるうとして、一緒に卓球やランニングなど、スポーツをしたり、日本語でしりとりをしながら日本の文化について教えてあげたり、食事をしながら相手のことを聞いたり、そうすることで、日本にいるのとは全く違う感覚になりました。メールアドレスを交換して、日本に帰ってきてからも楽しくメール交換したり、写真を同封して手紙を送って、交流して



University Art Museum

います。語学研修以外の形でも是非またミシガンに行きたいと思っています。

一方、注意しなくてはいけないこともありました。それは食事です。皆さんご存知のようにアメリカの食べ物、日本人の食文化と違って、一品の量がとても多く、味も濃いので、日本人の口には合わないものが多く、みんなカロリーにはとても気を使っていました。スポーツを多くしているのも、通販グッズにあるような筋肉トレーニングの機械が売れるのもうなずけました。

最後に、今後アメリカへ留学する人へのアドバイスとして、食べ物に気を使う、授業のある日は朝が早いので、早起きする習慣をつけておくことをおすすめします。

また、この留学を自分の意味あるものにするためには、自分から積極的に現地の方とコミュニケーションをとっていくことです。友達ができると、日本人だけで固まって行動することはあまりなくなって、語学力も自然についてくると思います。

『旅の恥はかきさて』『DON'T BE SHY』の精神でいってほしいと思います。また、共にこの語学研修を経験した仲間、引率の先生との交流も大切にしていくて欲しいと思います。

図書館というとまず思い浮かべるのは、テスト期間中によく利用する閲覧室や開架図書のコーナーでしょう。しかしそれは図書館の機能のごく一部だけなのです。図書館は情報の宝庫です。それを十分に活用すれば、もっと豊かなキャンパスライフができるようになることうけあいです。それでは宝の山へのツアーの始まりです。



閲覧室（経済）



雑誌閲覧室（教育）



閲覧室（教育）

### 閲覧室（経済：1階 教育：1階と2階）

閲覧室には開架式になっている各分野の図書だけではなく、参考図書コーナーにゆくと、さまざまな語学辞書・百科事典・年鑑・地図・白書などがそろっています。聞いたことのないような珍しい分野の事典など、ぱらぱらめくってみただけで楽しいものです。ものしりになるにはまず事典から…。

新聞コーナーには、一般的な全国紙だけでなく、日本産業新聞、Japan Times、京都新聞のような新聞も読むことができます。下宿で新聞をとらなくても、早起きしてひとつの記事を各紙で読み比べてみてはどうでしょうか。ワイドショーをみるよりずっと役に立ちます。

開架の一角には、教官の著書や指定図書というコーナーもあり、先生たちの書かれた本、実際の授業に使う参考書などが置いてあります。

パソコンコーナーでは、本の検索だけではなく、ワープロやインターネットを利用することもできます。またビデオ資料とテレビを置いてあるコーナーもあります。

### 郷土資料コーナー（経済：1階 教育：1階）

閲覧室の一角に、大津市や滋賀県を中心に、郷土資料のコーナーがあります。市町村史、古い郡誌、統計資料などが置いてあります。演習などで、県内の地域のことを調べる宿題が出たらいつてみましょう。

### 雑誌閲覧室（経済：2階 教育：2階）

本はあまり読まなくても雑誌なら読むという人は結構いるのではないのでしょうか。図書館にも雑誌が数多くおかれています。学術雑誌のほか、「文藝春秋」や「婦人公論」などの月刊誌、「週刊朝日」のような一部のまじめな(?)週刊誌もあります。ちょっとおかたいところでは、「日経ビジネス」や「AERA」などもあります。本屋で立ち読みするよりゆったり読めます。

そんな雑誌、オジさんの読むものだ、なんて思っていないか。なかには「ネットお見合いの裏側」や「100円ショップの実態」など、気軽に読むことのできるものもあって楽しめますよ。教育には「教員養成セミナー」などもおいてあります。

また「TIME」などの外国の雑誌は、生きた外国語として語学の勉強用という利用法もあるでしょう。

### 就職コーナー（経済：1階 教育：1階）

「大学は人生にとって長い夏休みのようなものだ」誰が言ったかは知りませんが、そんな言葉もあるように、大学在学中は自分をじっくり見つめ直すことのできる時期です。

10、20年後、私は何を考え、何をしているのだろうか。そんなライフプランを考えるきっかけにしてもらいたい場所、就職資料閲覧コーナーが図書館には設置されています。

## 書庫（経済・教育ともに1階から3階まで）

図書館の本の大部分は、閲覧室には出ていません。残念ながら学部学生は、自由に書庫には入れませんが、経済の書庫には23万冊、教育の書庫には17万冊の本が収蔵されています。

その中には、戦前からの日本の雑誌や大学・研究機関の紀要、欧米や中国など海外で出版された書籍・雑誌、企業の決算報告書、遺跡の発掘報告書、大型の図鑑や地図などなど、まさに「知識の宝庫」なのです。

一般学生が気軽に手に取って、というわけにはいきませんが、閲覧したければ、所在を調べてカウンターでの手続きの上で閲覧貸出ができます。



まさに「知識の宝庫」である書庫

## 蔵書印から

経済には彦根高等商業学校時代からの図書、教育には滋賀県大津師範学校、滋賀県女子師範学校など、それぞれ前身の学校の図書が引き続いて収められています。それらはほとんど閲覧室には出ていませんし、コンピュータでは検索できませんから、カードで探す必要があります。

古そうな本に出会ったときには、表紙近くの蔵書印を見てください。図書館の本には、すべて受け入れたときの日付けとか、通し番号がつけてあり、そのときの学校名の印章が押してあります。そんな図書をいつ誰が読んでいたのか、想像してみるだけでも楽しいではありませんか。



彦根高等商業学校の蔵書印



滋賀県女子師範学校の蔵書印

## OPAC (Online Public Access Catalog)

パソコンによる蔵書検索機能のこと。主に1988年からの受け入れ図書について、書名・著者名・出版社名などから検索できるようにしてあります。

また他大学の資料も検索でき、現地まで取りに行かなくても1ページにつき35円でコピーを送ってもらうこともできます。これは滋賀大学のホームページからも検索できるので、図書館に足を運ばずとも、自分の部屋のインターネットから調べることもできて大変便利です。



OPACの検索画面

## 絵本（教育：1階）

小さな頃から本を読むより絵を見て本を楽しんでいた経験ってありませんか？そんな絵本も大きくなるにつれ、手にとる回数もぐんと減ったのではないのでしょうか。ここでは世界各国の絵本をみることができます。もちろん外国語表記ですが、絵だけでもとても楽しめます。辞書片手に訳してみるのもまた面白いかも。

## 日曜日の図書館利用（経済）

月に1回、第1週目の日曜日に図書館が開館していることを知っていますか。学生だけではなく、地域の人でも手続きをすれば利用できます。



附属図書館の詳細はカウンターに備え付けの概要をご覧ください

滋賀大学のなかで、これまでスポットを当てられなかったところ、当たり前で紹介しかされてこなかったところ、そんなところを探し出して「探検」してみよう、というのがこの企画です。それもできるだけ学生諸君のフレッシュな眼でみてもらおうと思っています。もっとこんなところがあるという意見をぜひお寄せください。

今回の「探検」にあたっては、経済学部の櫻井豊明君、教育学部の井上晴葉さん、桐畑ひふみさんにもとになる原稿を作ってもらいました。

## 最終回 ネット社会の将来を知る



図2 取引の形態

換するようになった人など、ネットワーク技術の進展によって、それまでの生活様式が変貌することになるのです。

また、労働環境については、情報ネットワークを利用して働くということも、次第に増えていくことでしょう。ソフトウェア開発担当の技術者や芸術やデザイン分野などでは、会社へ定時に出勤しなくても仕事の効率が向上するケースが存在するからです。

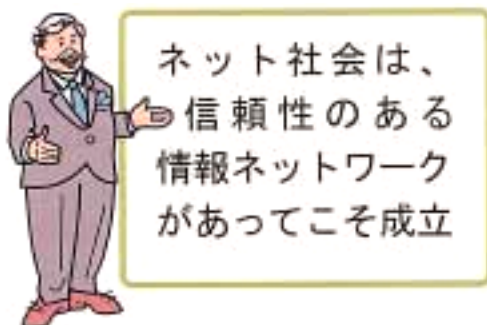
情報ネットワークは確実に私たちの生活基盤の一部を担うものとなっています。

## 産学官交流

異業種間の情報交換による相乗効果が期待できるとして、産学官つまり企業と大学と公的機関が互いに交流を深めることは以前から行われていますが、この推進力として期待されているのが情報技術や情報ネットワークです。

企業だけの交流では得られない高度なノウハウなどの知識・情報を直ちに事業として活用したいのが企業の立場ですが、大学などがもつ知識・情報は学問的・論理的な研究成果で、実用化を念頭においたものではないことも少なくありません。また、産学の交流や共同研究を支援する行政の役割も重要です。地域を支える産業を活性化するため、新しい知識・情報を持った競争力のある企業を創出し、異質な組織が交流する施設や人材を確保することに、行政が経済的・政治的な支援による調整機能を発揮することがポイントとなるでしょう。

産学官交流では、各組織はそれぞれ自己の主体性を維持しながら相互に知識・情報を共有することになります。そこで産学官が仮想的な組織を形成して、それぞれが場面に応じて主体性を発揮できる環境を、情報技術・情報ネットワークによって実現するのです。共同研究によって得た知識・情報を



インターネットへ公開して広く一般からの投資を呼びかけ、さらに次のステップに進んでいくという方法もあるでしょう。また、各組織が遠隔地に離れている場合や、経済的な問題で施設を持つことができなくても、テレビ会議システムやウェブ上で仮想的な空間を確保して情報交換することもできるでしょう。効率向上だけでなく、相互が柔軟に組織運営するためにも、情報ネットワークの活用が求められています。

## 現実の社会的課題

新しい情報技術の開発により、さまざまな利用形態が生まれ、より多くの人々が情報ネットワークを活用できるようになりました。しかし、さらにネット社会を発達させるためには、技術的課題を解決するだけでは不十分です。経済、法律、政治などの側面で情報ネットワークを支援していく必要があります。

例えば経済的な面では、超高速インターネットの全国展開やITニュービジネスへの支援強化などを目的として、平成12年度補正予算案でIT関連分野に約870億円が計上されました。この予算は一時的なものですが、それでも経済的な支援を得ることで情報ネットワークにアクセスする環境を提供する動機付けが行われる効果があるでしょう。

法律面では、IT基本法をはじめ、不正アクセス禁止法や個人情報保護基本法などの制定によって、法整備が進んでいますが、その一方でさらなる規制緩和を行っていく必要があるでしょう。各種の行政手続について、インターネットを活用した行政手続の案内・教示、申請書等様式の提供を行うとともに、手続自体のオンライン化を進めることや、電子媒体（フロッピーディスク）による手続を認めるなどの規制緩和も進んでいます。

日本政府はe-Japan戦略を発表しましたが、政治的な支援としては、情報基盤整備を集中しやすい大都市圏だけでなく、人口の少ない地域にも何らかの施策をすることも必要でしょう。また、ベンチャー企業などを含むビジネス市場において、有用性が高いが採算ベースに乗らない分野などに対する支援策も求められています。

まだまだ課題も残っていますが、引き続き社会的課題を一つずつクリアしていけば、安全で信頼性がある使いやすいものが創造でき、あらゆる人が情報ネットワークを利用する機会を均等に広げることにつながるでしょう。

## 【参考文献】

- 蒔田：国内PC市場の成熟度と牽引要素、インターロップマガジン、pp 86 - 88、2001年 3月号  
 小川：企業のネットワーク革新 多様な関係による生存と創造、同文館、(2000)  
 力武：プロフェッショナルインターネット、オーム社、(1998)  
 神場、古閑：インターネットマーケティングの技術と応用、人工知能学会誌、15巻、3号、pp 412 - 418、(2000)

# ここがポイント!! 「ネット社会を知る」

滋賀大学情報処理センター助手 中川 雅 央

## 最終回 ネット社会の将来を知る

インターネットの利用者は急激に増加しましたが、一人一人がさらに有効活用できるには、より広範囲かつ深い情報ネットワークの理解が必要となります。近年では、小学校から高等学校における教育の情報化が進行してコンピュータを利用できる環境が整備されるとともに、住民票や各種申請手続きの電子化や電子商取引が普及しています。それがユーザを刺激することとなり、一人一人の情報リテラシーも向上すると思われます。今回は、近い将来に到来する「ネット社会」（情報ネットワークが重要な要素となる社会）について、どのような社会になるのかを考えていきます。



図1 情報ネットワークは世界を網羅

### ネット社会で拡大するビジネスチャンス

今や世界を網羅している情報ネットワーク（図1）には地理的にも時間的にも市場の拡張効果があります。ビジネスの様々な側面に情報技術（IT）を適用することが検討されるようになりましたが、この理由の一つは、マーケティングと購買行動との関連性が高くなっていることにありそうです。つまり、企業のマーケティング活動が消費者の購買に結びつく度合いが、より高くなりつつあるのです。

従来からPOSシステム（Point of Sales：販売時点情報管理システム）の購入履歴分析によるマーケティングデータは、購買行動そのものしかデータとして蓄積できませんでした。情報ネットワークを利用したものは、顧客がどのようなウェブページをたどって商品情報にたどりついたのか、ページに来てから実際に購買するまでの時間はどれくらいであったのかなど、購買行動だけでなくそれに伴う周辺情報のデータも容易に取得でき、よりきめ細かく大量の情報から、さらに高度なマーケティング活動が可能となるでしょう。

しかし、このようなマーケティング活動はここ数年間に発生したものであるため、これからまだまだ発展していく可能性があります。

### 電子商取引

従来から、銀行の現金自動支払機のように商取引そのものを電子情報化する動きはあります。電子商取引（Electronic Commerce：以下EC）の意味することは広範で、これを定義することは難しいのですが、ここでは情報技術の発達によって社会的基盤として多くの人が利用する一般化したものをECと表現します。

取引の形態には図2に示すような企業間取引（B to B：Business to Business）と企業消費者間取引（B to C：Business to Consumer）があり、特に現在は企業間の取引がECに移行している段階にあります。これまでのように電話やファクスで情報をやりとりするだけでは、顧客に対するクイックレスポンスに限界があります。リアルタイムな対応こそが企業サービスのセールスポイントであるため、素早い対応ができるための情報技術の活用が要求されることとなります。

一方、銀行業界にとっては、EC技術により伝統的な銀行以外の組織でも通貨流通の仕組みを実現できることとなります。既存の銀行で現金を払い戻したり、料金の振込みをしたりしていたことが、銀行以外でも可能となっているのです。例えば携帯電話端末から振込みができる、ネットバンキングなどと呼ばれる新しいサービスが提供されています。午前9時から午後3時まで銀行に行かなければならないといった制約は、なくなりつつあります。

このように、ECの広がりによって、私たちの生活様式も変貌していくことになるのです。

### ネットワーク技術が生活基盤となる

数年前まではインターネットを主に利用するのは国際間ビジネスや学術研究あるいは大企業などでした。ところが今や情報ネットワークは私たちの日常の職場や家庭の生活の中まで入り込んでくるだけの意義を持つものになりつつあります。

例えば、その日のニュースやテレビ番組表はインターネットですぐ情報を得ることができるため新聞紙の購読を解約してしまう人もいます。また、友人と長電話することが多かったのが、携帯電話端末を利用した電子メールで情報交



## 大いに刺激を受けた在外研究

平成十二年四月から十月までの在外研究では二つの研究機関で研究活動を行うとともに三つの研究機関を視察し資料収集を行い、また、ケンブリッジ大学で開催された国際会議で研究発表を行った。

モントリオールのエコール・ポリテクニクでは、繊維懸濁液の流路内の流れに関して GRASP (高分子応用研究センター) の Prof. Carreau 及び Dr. Geana と共同研究を行い、繊維の三次元配向ならびに繊維間の相互干渉を考慮した繊維懸濁液の流れに関する研究について今後共同研究を行うこととなった。これにより、従来の研究の枠を越え一歩進んだ研究を行える目途が付いた。

一方ウエールズ大学(アベリスタブス)では、高分子溶液の複雑な流れに関して数学科の Prof. Walters の研究室で研究を行った。この研究室では、急縮小流路内での高分子溶液の流れについて流れの可視化による研究が続けられており、私が日本で行っている流れの可視化実験結果と比較検討した。

更に、マサチューセッツ工科大学では、従来測定が困難であった高分子溶液の伸長粘度の測定が最近フィラメント・ストレッチング・レオメータを用いて行われている。今回の訪問では、測定装置の概要、測定方法、測定可能な溶液の特性ならびに測定上のノウハウを収集した。また、ケンブリッジ大学では、八月二十日から二十五日の間開催された第十三回レオロジー国際会議に出席し、「高分子溶液の不安定流動の発生メカニズム」について研究発表するとともに、非等方性流体の流れに関して各国の研究者と情報交換を行った。その後、同大学の化学工学科で高分子溶液の複雑な流路内における不安定流れのメカニズ



ウエールズ大学のアートセンターからカーディガン湾を臨む。

ムに関して討論を行い、不安定流れの発生源などについて情報交換し、有益な結果を得た。国際会議に出席していつも感じることであるが、今回も十分なる刺激を受けた。

今回の在外研究で訪問した、エコール・ポリテクニク、マサチューセッツ工科大学、ケンブリッジ大学、ウエールズ大学そしてスイス工科大学の研究機関の研究者達が、訪問者に対して研究面はもちろんのこと私生活の面でも親身になって世話をしてくれたことに非常に感謝しています。

例えば、モントリオールでは、初日に Prof. Carreau 自らが車でアパート探しを手伝ってくれたことには感激しました。自分自身、日本で外国からの訪問者に対して今までこのように親身になって世話をした覚えが無く、今後はこのような態度で接したいと思いました。

また、彼らは研究に対しては極めて熱心で、なぜそのような現象が生じているの

か、現象のメカニズムを深く考えます。そして、そのことについて他の研究者と盛んに議論をして、自身の考え方を確認、修正していくことが身についています。日本では、研究者同士が互いにある現象について議論をしようということが少ないので、今後は大いに進めて行くべきだと思っています。

それから、外国の研究機関には世界中の色々な国から研究者が訪れる機会が多いので、色々な考え方、意見を聞くことができ、常に刺激を受けながら研究が行えることを羨ましく思いました。上述のように研究面ではシビアですが、日本人と異なり何となく研究態度に余裕が感じられました。なぜかと理由を聞かれても答えられませんが、確かにシビアだけど余裕があるという感じです。日本での感じとまったく違います。恐らく、私生活でのゆとりが研究面でも現れるのかもしれませんが、余裕を持つてシビアに研究を行うことが質の高い研究成果を生み出す秘訣のような気がします。

研究面に関しては、色々な研究機関の研究者との討論ならびに情報交換から、今まで日本で進めてきた研究の方針の確認とどの部分を修正すればよいか、また、将来どういう方向で研究を進めて行くべきかが明確になったことが最大の成果だと考えております。

今後は、在外研究によって得られた研究面の成果ならびに日常の生活で感じたことを大学での教育・研究に大いに活かして行きたいと考えております。最後に、今回の在外研究が実現できたいなる刺激を受け、十分な成果が得られたことに対し関係者一同に感謝します。

千葉 訓司 (教育学部教授)

完成した研究棟の玄関



完成!  
教育学部研究棟



A棟(人文・社会・教育棟)及びB棟(自然科学棟)に隣接する形で完成した研究棟

## 競争社会の縮図

私は一九九八年七月から二〇〇〇年八月までの二年余りにわたり、フルブライト・プログラムにより、米国ノースウェスタン大学、ケロッグ・マネジメントスクール（J. L. Kellogg Graduate School of Management）、会計情報学科（Department of Accounting and Information System）に留学してまいりました。

約七〇校あると言われているビジネススクールの中で、私がケロッグ・スクーを留学先に選んだ最大の理由は、会計学研究に徹底して経済学的アプローチがとられていること、ランキングが極めて高いこと（全米でトップ三からトップ五以内）にあります。そこで今回は、ケロッグでの会計学研究及び大学院の教育プログラムの特徴に焦点をあて、簡単にこの報告させていただきます。

現在ケロッグの会計情報学科では、米国を中心として発展しつつある経済学のみならず、さまざまな分野、とりわけ情報経済学、契約理論、プリンシパル・エージェント理論、ゲーム論の会計学への応用に特化した研究を行っています。したがって、「会計学は経済学の応用分野である」というのがケロッグでの基本的なスタンスであると言えます。アメリカのビジネススクールの中では、かつてのいわゆるアイビリーグに属する大学やStanfordなども、会計学の主要な研究アプローチとして基本的に経済学を応用していますが、この点で、マネジメントの実践的な問題解決をより重視する Harvard Business School や日本での会計学研究とは一線を画しています。

一般的な経済学の研究方法に従えば、会計学の研究方法も分析的（Analytical）もしくはTheoretical Study）と実証的研究（Empirical）もしくはPositive Study）への

分類が可能ですが、ケロッグでは特に分析的な研究に力を入れ、R. S. Magoon, R. Anderson, S. Srinivasan など、この分野では全米屈指のスタッフを擁しています。私はこれらの指導教授のもとで、会計ディスクロージャーの理論、経営者報酬契約が会計利益操作に及ぼす影響について研究を行いました。スタッフの国籍やバックグラウンドは実に多様で、大半の研究者の学部及び大学院での専攻分野は数学、統計学、経済学であり、日本の会計学研究者のそれと比較した場合に最も大きな相違点であると言えます。

年に数十回開かれる会計学ワークショップには、全米の代表的な大学から、Ph.D. プログラムの学生や研究者などが論文の報告に訪れ、最新の研究成果について激しい議論がなされます。つまり、将来学術雑誌で公表される重要な研究の創造プロセスを共有する一種のコミュニティが形成されていると言えます。ケロッグのその他の学科（Finance, Marketing, Organization, Management and Strategy, Managerial Economics）でも同様のワークショップが開催されており、どの学部の学生やスタッフも自由に参加することができ、ノーベル賞クラスの研究者がセミナーを行うこともめずらしくありません。

大学院のプログラムは、日本と同様に修士課程と博士課程に分かれますが、ビジネススクールの修士課程はいわゆるMBAプログラムとして知られています。MBAプログラムは、主として現場での問題解決手法を学ぶことを目的としており、複雑な数学やアカデミックな議論は最小限に押さえないながら、実践的な問題演習とケーススタディを中心とした授業が提供されています。この点で、MBAプログラムは、Ph.D. プログラムへの進学を前提としないプログラムであるとして一般に認識されていま

す。授業スタイルは日本と同様に、講義ディスカッション、プレゼンテーション、個人研究など、科目の性格や学生のニーズに応じて多様な形態がとられています。どのような授業形態であれ、基本的には全員参加型でインタラクティブな授業となっています。一学年約六〇〇人の学生は世界の約五〇カ国から集められており、国籍や文化の違いを越えた理想的なマネジメントの在り方について二年間集中的に勉強します。プログラム終了の平均年齢は二十七才から二十九才で、修士取得後の初任給の中間数は十三万ドル前後となっています。

他方、ビジネススクールのPh.D. プログラムは、将来全米のビジネススクールでジョブを確保できる研究者の養成を目的としています。MBAプログラムと同様、世界各国から学生が選ばれてきますが、大半の学生がMBAの学位を持っていないことは意外な事実です。会計情報学科の場合、入学後三年間はいわゆるコースワークにあてられ、経済学部、工学部、理学部、会計情報学科などの博士課程及び修士課程の科目を中心に履修します。研究に必要な経済学関連の科目、計量経済学、数理統計、さまざまな数学科目、会計学セミ

ナーなどが主なものです。コースワークを教える教官はいずれも各分野の一流で活躍する著名な研究者で、内容の難易度もさることながら、要求される量も想像を絶しています。コースワークを終えたとその後約三年を費やしていくつかの論文を作成しますが、コンサルティング会社や監査法人などでの職務経験が無い学生は、この過程でパートで職務経験を積むことが要求されることも多く、また入学初年度から学部やMBAのプログラムで講師（ないしはTA）として授業を担当しなければなりません。この点では、研究能力とやらんで教育能力が非常に重視されていると言えます。最終的には、このような過酷なプログラムを無事に終えることのできる学生は入学者の四割程度ですが、会計情報学科の最近三年間の学生の就職先は、Harvard Business School 一名、British Columbia 大学一名となっています。ちなみにケロッグの会計情報学科の初任給は年間約十五万ドルと言われています。



ビジネススクールの廊下にて

以上がケロッグでの会計学研究及び大学院の教育プログラムの概要ですが、いずれもそれぞれの目的に応じた合理化と最適化が図られているという意味では理想的な研究・教育環境が構築されている一方で、我が国におけるような多様で柔軟な学問への取り組みが犠牲にされている、というのが私の印象です。留学のための受験勉強に専念した三年間とケロッグでの二年間、寝食を忘れて取り組んだこの五年間は、いろいろな意味で私にとって人生で最も過酷で貴重な体験となりました。今後は、この経験を教育と研究に生かしていきたいと考えています。未筆ですが、長期に渡る留学の機会を与えてくださった全ての方々に、とりわけ滋賀大学のファカルティに心より感謝いたします。

宮西賢次（経済学部助教授）

カレルヴァン・ウォルフレン(鈴木主税訳)著  
**『人間を幸福にしない  
 日本というシステム』**

新潮OH!文庫(二〇〇〇年)

「しかたがない」。みなさんはこの言葉を口にしたり、耳にしたことがないでしょうか。慣れ親んだ言葉は自覚しないとそれを使っていることに気づかないものです。

「人間を幸福にしない日本というシステム」というショッキングなタイトルを付けられた本書の著者は、私たちが、何気なく口しているこの「しかたがない」という言葉をキーワードに、日本の政治システムについて語っています。

著者が、来日したのは三十年以上も前のことだそうですが、この言葉との出会いを次のように説明しています。

「喫茶店でソフトドリンクを一瓶注文したつもりなのに、瓶の中身はちよつぱり注いだだけで、ほとんど氷で埋まったグラスをだされたときにはさすがに腹がたつた」。しかし、日本人はこれを「無抵抗に受け入れる」。著者には、この「日本人の従順さ」は「驚愕」すべきことだったようです。

しかし、後になって判ったこととして、この態度には「自尊心」が絡んでいて、騒ぎたてないのが「大人の態度」であり、「文句ばかり言うのは、迷惑だけではなく子どもじみていて、わがまますぎる」と考えられている」としています。そしてこうも言います。

「日本には、したがないと言えるようになれば大人になった証拠だと見なす伝統がある」。

しかし、著者によれば、「しかたがない」という言葉こそ、「日本人が政治を語るときに最も重要な言葉でありつづけ」、「この「ひとこと」の力で、日本人を政治的に閉じこめる檻の格子は強化され、扉はしっかりと閉ざされる」。また、私たちが「しかたがない」と考える習慣を捨てない限り、人々を幸福にしない「日本というシステム」は存続しつづけるとも主張し、日本人が少しばかりの勇気をだして、この習慣を捨て文字通りの「市民」となり、真の「市民社会」を実現することを勧めています。

ここまで紹介すれば、著者がいう「日本というシステム」とは、日本の権力機構についてのことだとわかるでしょう。それはどのようなシステムなのでしょうか。多くを紹介することはできませんが、著者は、日本の権力機構の特徴を「民主主義」に隠されたなにもにも制約されない「官僚の支配」、すなわち「官僚独裁主義」と手厳しく規定しています。またそれが「豊かな国の貧しい国民」に結果しているとも主張しています。

本書は、外国人が日本に住み、生活者の視点から、私たちが遠い存在である権力機構の分析を通じて、日本というものを全体として語っている、非常に興味深い一書です。是非、一度手にしてみてください。

阿知羅 隆雄(経済学部教授)

私の薦める1冊の本

信原幸弘著

『考える脳・考えない脳  
 心と知識の哲学』

講談社現代新書(二〇〇〇年)

本書は「心とはいったい何かなるものであるのか」という問いに対して回答を与えようとする試みである。最近の脳科学の展開を視野に入れ、心の働きと脳の働きとの関係をどのようにとらえるべきかという観点を絶えず意識しながら議論が進められる。

心と脳、あるいは心と身体との関係をめぐる問題というのは、非常に古くからある哲学問題のヴァリエーションである。しかし、それは心に関するもっとアクチュアルな問題。たとえば、現代がこころの時代である、と言われることのうちに含まれているような問題。とも決して無縁ではない。

一見するとこのことはわかりにくい。たとえば、人々の心の複雑なあり方が生み出すさまざまな問題は、おそらくそれらがあまりにも多様で多彩であるがゆえに、心の働きと脳の働きとの関係などといったごく基本的原則的なことがらとは直接の関連を見出しにくい、そんなふう感じるのは自然なことだろう。

しかし、じつはその印象は必ずしも正しくはない。本書では、心と脳の関係について適切に考えるための「枠組み」を作り上



げる作業が行われている。心のようなつかみどころのない、あるいはむしろ、ある意味でさまざまな仕方でも漠然とつかめてしまつような対象について、しっかりと、科学ときちんと折り合いのつく形で理解するためには、このような作業が欠かせない。そうしてできあがった「枠組み」は、高度な心の働きの諸相を正しく理解しようとする際にも、十分役立つはずのものなのだ。

著者はいわゆる分析哲学のスタイルで議論を展開している。いかなるテーマについてであれ、緻密に考えようとするとき、このスタイルは有効に機能する。ただし、細部の緻密さを維持しながら、肝心のテーマについての主張の明確さを実現することは、一般にはなかなか困難なことである。本書はそのハードルをやすやすとクリアしている。そのことは最終章において著者が到達するエキサイティングな結論を一瞥すればわかるだろう。たとえば、いわく「心は脳を超えて、身体や環境にまで広がっている」と。

本書で、この主張へと至る議論をじっくりと味わっていただきたい。

齋藤 浩文(教育学部助教授)



## 私にとっての研究の醍醐味

初めて研究なるものの一端に触れたのは学部四回生の時になる。とにかく面白そうなることを研究している先生に「こう」と思い選んだのが、機械科ではあるが、冶金系の研究室であった。

元々大学院への進学を希望していたことから、次の年に使う試験機を同じグループの同級生三人で設計することになった。当時の金額で付属装置全部を含めて五百万円ほどをかけた記憶している。いくら力学と設計を学んだとは言え、素人に研究室の予算の大半をかけてこれからの研究のメインに使う試験機的设计をさせるとは、こちらにとってみればとんでもないプレッシャーだった。当の先生曰く、「まかせた」。

他の研究室でも、試験機などの設計製作は日常的に行われていた。いろいろと理由はあるのだが、研究目的に合致する試験機は自分で作らない限りは手に入れることができないこと、類似の試験機を購入するとその数倍の金額がかかり、また、その試験機を改造しないと使い物にならないことなどである。しかし、一番の理由はうちの先生は設計も図面も全くわからなかったことが原因なのかもしれない。

今でも思い出すのは数ヶ月かかって数十枚の図面を書き上げて外注した時のほんとにこれでよいのか、という不安感と、そして自分達が考えた試験機

が完成し、工場の片隅に鎮座しているのを見た時の感激。この試験機を使って、博士前期そして後期課程の研究を行った。使ったつれて愛着もわいたが、その反面、使いにくさ、別の言い方をすると設計のまずさ、を実感した。しかし、それにもまして自分の研究をするために必要な装置を自ら考え作り出し、それを用いて実験をするというおもしろさを先生に教えてもらったのだと思う。

それ以来、治具類も含めて大小いろいろな装置を設計また自ら製作して研究に使ってきた。写真にあるのは進行中の、加圧焼結における金属粉末の緻密化挙動の研究に使っている真空ホットプレス装置である。自作装置の常で所期の性能を出すための調整に数ヶ月かかったが、これほどの精度と能力を持つ装置は世の中には無いと自負している。あとは自分のアイデア/能力次第、でしょうか……。

さて、また実験室にでも行ってきましょうか。

磯西 和夫（教育学部助教）



## 私の研究

### 研究姿勢と方法

このようなコラムを書く人は、自分の研究あるいは自分の学問を信じ、そして愛している人が一番望ましい。そのような意味で私は一番不適切である。

私の研究領域は社会科学の中の一分野である経済学である。その中でも日本で言うところの近代経済学である。この近代経済学の分野では特に自分の研究を信じて日夜没頭している人が多い。別な言い方をすれば、自分の信念を信じていることと、自分が行っている研究方法との明確な違いを混同している人が多い。

経済学は社会科学であるから、主観的な部分を無視することはできない。むしろ、その主観的な主張、あるいは信念が一番重要である。経済学を信じてはいけない、しかしその経済学で信念を貫く、というのがこれまでの私の研究姿勢である。

近代経済学が提供するものは一つの分析手法であり、社会を如何にみていくかという点でただの道具の提供ではない。経済学者が真に問われるべきものは、その道具が如何に美しいかではなく、その道具を簡単に使って如何に社会を洞察するかという点である。

私が研究活動をしたと思った大きなきっかけは、大学時代の恩師の言葉である。私の恩師はドイツ労働運動史が専門で、所謂マルクス経済学の専門

家である。ゼミでは資本論、あるいはその解説書である平田氏のコメントなどを読んでいた。その恩師が経済学者はどうあるべきかということに熱弁してくださって以来、私の研究意識は一貫している。ただ、大学時代の恩師と異なっているのは、使っている道具の違いである。

井上靖氏の小説に三人の異なった僧侶が出てくる小説がある。山にこもるべきか、町に降りて社会で説くべきか、あるいは時の政治を使って改革を行うべきかと言う三人の僧侶である。心情的には一番目の僧侶が私の理想である。しかし一方で、何のために社会科学を研究しているかと考えると、未だに自分自身の方向がはっきりしない。

私は後者二つのタイプも選択できるようにと、近代経済学の手法を選択した。この優柔不断な姿勢は現在の研究対象にも及んでいる。年金、医療、財政赤字とあまりにも手を広げすぎている。ただ、ここで弁明することが許されているのであれば、大学院時代に祖父と二人で住みながら彼の介護を自分の手で行ったという経験が一貫した研究意識を支えている。高齢者が安心して生活できる社会を如何に実現するかと言う問題意識である。この実現に博愛的主張は役に立たない。昔の経済学者が言ったように、熱い心と明晰な分析が必要である。

加藤 竜太（経済学部助教）

## 近江の散歩

### 比良山地東麓の「鹿石垣」

湖西線志賀駅から国道一六一号線を二キロメートルほど北上すると荒川集落がある。大谷川が形成する扇状地面上に立地する集落と、その上部の山林を区切るように石積み「しし垣」が築かれている。これは集落や耕地への野生獣の侵入をふせぐためであるとともに、大谷川の土石流災害に関連する施設であると推定される。

明治十年代の作成と推定される旧荒川村と旧木戸村の地籍図にもはっきりと「鹿石垣」が記され、大谷川右岸から木戸集落上部の比良山地斜面を横切って、野離子川左岸に沿って湖岸に達するように描かれている。別の明治前期作成の地籍図には、大谷川と比良川との間にも鹿石垣が描かれており、比良山地東麓の村々には、集落と山林の間に鹿石垣が介在するのが一般的であるかに思われる。

しかし、現在は鹿石垣の大部分は石垣がくずれ、連続したものとして残存するのは旧荒川村の部分のみである。国道より上部の大谷川に近い部分は、一九三五（昭和十）年の土石流災害の際に破られたものを修復したものである。高さは集落側からは二メートル以上、外周道路からでも湖岸が望めないほど高く積まれた箇所もあり、天端部の幅は一メートル以上で、実に堅牢な

## 附属学校から

### 大津市障害児学級・養護学校作品展に出展しました

2月2日から7日まで、大津市歴史博物館で「大津市障害児学級・養護学校作品展」が開催されました。これは毎年この時期に大津市内の障害がある子どもたちの図工・美術などの力作が一堂に会して展示されるものです。

本校在籍生徒は小学部10名、中学部17名、高等部23名の合計50名ですが、全員が日々取り組んでいる実践の中から、その成果を見てもらおうとそれぞれの力作を出展しました。

小学部では、自分の身長より大きい画仙紙に力いっぱい表現した「書」の作品、コロコロローラーを使った版画や先生の顔などをのびのび描いた絵画作品、そして粘土をこねて運動場で「野焼き」をして作った、世界にひとつしかないお皿などを展示しました。

中学部では、同じく大きな画仙紙に墨の濃淡を生かしてのびのび描いた「書」作品、花や鳥などの自然物を色紙や画用紙に丁寧に写生した絵画作品などを展示しました。実はこの作品の中には、「滋賀県美術展」特選に選ばれた絵画作品も数点含まれています。本校の美術作品のレベルはかなり高く、日々生徒たちも生き生きと熱心に美術学習に取り組んでいるのです。

高等部は、「書」作品や色紙を使った平面作品のほかに、学部として週12時間学習をしている「作業」の作品も展示しました。「印刷」「木工リサイクル」「陶工」「織物」の4つの作業班の作品は、手が込んでいたり、とても本格的であったり、日々真面目に取り組んでいる作業学習の成果が数々の作品にひとときわ花を添えた感がありました。

美しいものを美しいと感じ感動できる気持ちは、障害があるだけでなく人間としてとても大切な気持ちです。「豊かでふくよかな情緒」をはぐくみ、仲間とともにより高い文化を身につけるべく、附属養護学校の児童生徒たちは、今日も熱心に毎日の学習に取り組んでいます。

附属養護学校 河原林 美代子



展示された作品



作品製作に取り組む生徒

# 報道された主な記事（一月～二月）

印象を受ける。一方、大谷川から離れた木元神社付近の石垣は連続しているものの、半ば崩れているように見える。砂防堰堤など近代的な砂防施設の登場によって形骸化したのであろう。

比良山地の東麓、とりわけ中部から北部にかけての風化花崗岩地帯の村々は、土石流災害が頻発した地域である。土石流を避けるため大谷川の流路を村の北部に固定することによって、居住空間としての集落が形成され、同時に灌漑用水が確保できるので、耕地の開発が可能になったといつてよい。村人たちは古くから堤防の修築などによって生活の安全を確保しつつ、日々の糧を得てきた。鹿石垣もそうした砂防施設の一部として機能していたことを思えば、鹿石垣は土石流という自然現象との相互作用の中で、村人たちが築いたモノユメントなのである。

松田 隆典（教育学部教授）



木元神社付近の鹿石垣

## 一月

- \* 「ふるさと滋賀」へのメッセージ、佐竹直子さん（教育学部四回生）、（京都）（1・1）
- \* 大学院修士課程の専攻・専修の新設と産業共同研究センターの省令化（中日）（1・7）
- \* 「おうみまちづくりフォーラム」開催案内 産業共同研究センター（読売）（1・6）（他）
- \* 滋賀大学人事 会計課長（中日）（1・6）
- \* 新世紀 湖国経済を展望 有馬敏則教授（中日）（1・11）
- \* 滋賀大学運営諮問会議開催（京都）（1・18）（他）
- \* 大学入試センター試験始まる（京都）（1・21）（他）
- \* 第四十四回日本学生科学賞 環境大臣賞表彰式 近藤敦土さん（附属中二年）（読売）（1・23）
- \* 故鈴木紀雄名誉教授の遺志を継ぎ教え子達が『環境学と環境教育』出版（京都）（1・26）
- \* 滋賀大学運営諮問会議冊子『個性ある魅力的な大学をめざして』（中日）（1・28）
- \* 環境教育湖沼実習センター研究発表会開かれる（読売）（1・28）
- \* 県内国公立大の二次試験願書受付（京都）（1・30）
- \* 「おうみまちづくりフォーラム」開かれる 産業共同研究センター（中

## 二月

- 日（1・31）
- \* 学長インタビュー「新たなパートナーシップを築く」（滋賀プラスワン）（2・1）
- \* おうみまちづくりフォーラム「近江八幡市」開催案内 産業共同研究センター（読売）（2・1）（他）
- \* フォーラム「生涯学習の現代的課題」参加者募集 生涯学習教育研究センター（京都）（2・1）
- \* 「タカラモノ展」開催 教育学部学生、卒業生グループ（京都）（2・6）
- \* おうみまちづくりフォーラム「愛東町」開催案内 産業共同研究センター（読売）（2・8）
- \* 滋賀大学退官記念講演会開催案内 小野幹夫教授、鳥本昇教授、林正教授（毎日）（2・9）（他）
- \* 展示会「地球を救おう 地球救助隊」 附属小六年ろ組（読売）（2・9）
- \* 「びつくり表現フェスティバル」始まる 附属小学校（京都）（2・14）（他）
- \* 「花登笹文芸奨励賞」作文部門 最優秀賞受賞 久泉貴詩さん（附属小六年）、演劇シナリオ・小説部門 優秀賞受賞 木村華代さん（附属中二年）（京都）（2・20）（他）
- \* 滋賀大学美術展開催（産経）（2・21）（他）
- \* 校内LAN構築し障害児教育 附属

- 養護学校（読売）（2・23）
- \* 卒業作品展 経済学部写真部（毎日）（2・25）（他）
- \* 大学院に「グローバル・ファイナンス専攻」設置（毎日）（2・26）（他）
- \* 産業共同研究センターが昇格（中日）（2・26）
- \* 国公立第二次試験前期日程始まる（京都）（2・26）（他）

滋賀大経済学部

### 大学院にファイナンス専攻

### 社会人の受講OK

4月開講 京都に分室も予定

国際金融分野  
即戦力を育成

本学は、経済学部の大学院に「ファイナンス専攻」を設置し、社会人の受講を歓迎する。専攻は「国際金融」をテーマとし、グローバルな視点から金融市場の動向を分析し、実践的な知識とスキルを習得できる。また、4月開講のため、京都に専攻専用の分室も予定している。興味のある方は、ぜひお問い合わせください。

京都新聞（平成13年2月22日）



編集発行：滋賀大学広報委員会

委員長 門脇 延行（副学長）  
川嶋 宗継（副学長）  
秋山 元秀（教育学部）  
磯西 和夫（教育学部）  
黒石 晋（経済学部）  
岩崎奈緒子（経済学部）  
山崎 勝也（総務課）  
宮本 俊明（学生生活課）  
（ 印は本号のチーフ）

〒522-8522

彦根市馬場一丁目 1 - 1  
（ Tel : 0749-27-1172 ）

発行日：平成13年 3月

E-mail : [koho@biwako.shiga-u.ac.jp](mailto:koho@biwako.shiga-u.ac.jp)

ホームページ : <http://www.shiga-u.ac.jp>